

琉球大学学術リポジトリ

青年期における社会的認知と自己像の関係性についての研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15888

青年期における社会的認知と自己像の 関係性についての研究

A Study on the Relationship of Social Cognition and Self-Concepts in Adolescence

島 袋 恒 男

Tsuneo Shimabukuro

I. はじめに

青年期の始まりは第二次性徴の出現に伴なう内面世界の発見と、抽象的思考能力に代表される形式的操作の発達によって特徴づけられる。このような発達は青年期の自我に抽象的な社会的認知を可能にし、そしてそれを受けて、内面に行動の基準、指針となる自己像や価値観の形成を促がすことになる。

ところで青年期の自己や人格の発達を個性化（individuation）という概念で説明していくことが多々ある。多くの場合青年期の自我のめばえやそれにひき続く自己意識の発達の個人差や独自性を強調する意味で使用されていることが多いようだ。

例えばシュブランガー、E（1924）は、青年期の「主観それ自身を一個の世界としてみい出すこと、すなわちつねに孤島の如く世界のすべての事物および人間から離れた一個の世界として発見すること」を自我の発見と呼び、それが青年の意識的発達における「生活設計」の確立を促がし、そして「個々の生活領域」の選択を可能にする個性的・独自の発達が起こることを示している。また宮川（1973）は、青年期は①職業や社会に対して、また家庭に対して責任のもてる社会人になること、他人とともにそして他人のために活動する人になる

社会化による発達とともに、②自己を確立すること、自我の形成という個人化による発達が重要になると指摘している。

柏木(1981)も人格発達における青年期の社会化による発達と、個性化による発達について論じている。その中で青年前期の自己の形成は、他者から見られたあるいは期待される反映自己を中心としており、反映自己に向けて現実自己を修正・形成していくこと、そして青年後期の自己の形成は、望ましい理想自己を形成し、理想自己に向かって現実自己を修正・形成していくようになっていくと指摘している。前者は自己像の社会化に、後者は自己像の個性化に関係していることがわかる。このような認知的な自己像の社会化、個性化による発達は、青年に社会的に期待される価値的に望ましい行動特性に関する認知的発達をも進行させ、その中で反映自己、理想自己を形成、選択させることを示している。このような意味で、青年期の同一視を可能とする大人関係や仲間関係のあり方は、青年期の自己像の発達に強い影響を与えることになることは多くの研究が指摘するところである。

ところで Ziller, R.C (1963) は青年期の個性的発達について次のように述べている。「個性化とは、社会環境に関する主観的な認知によって大きく規定され、その認知の中で自己を他の社会環境から分離して位置づけることである」と定義し、社会的、客観的条件のあり方が自己像の把握とその発達を規定していくと考えている。具体的には①所属するグループのメンバーシップ ②仲間グループの遂行に関する情報に基づき、社会的比較を通して、青年は自己像を把握し、形成していくことになる。このような Ziller の考え方には、自己認知が社会的認知の一側面であること、そして自己認知を個性化の次元で把握することの必要性が強く示唆されている。また柏木や Ziller の自己認知の発達の考察から、青年の自己の形成・発達は社会的に承認される人格特性に向けて方向づけられていることがわかる。

Wicklund, R. A と Gollwitzer, P. M (1982) も自己の発達において、人は目標とする自己像に強くコミットし、そしてその自己目標のあり方を左右する

社会的に承認されるイメージが存在することを仮定している。

本研究では、自己像の発達が基本的に社会的比較を通して成立するということから、社会的認知の一環としての個性概念について検討すること、そしてその上で自己像の個性化について検討を加えることを目的とする。具体的には上記の目的を達成するために、

- ① 社会的認知における人格特性レベルでの個性概念について因子分析を実施し、その次元の特徴を明らかにする。
- ② 個性概念で示される自己像の個性化とその方向性に関して、現実自己、反映自己、理想自己の関係性について検討する。
- ③ 個性概念のあり方と自己認知（現実自己、反映自己、理想自己）の関係について正準相関分析を用いて検討する。

II. 方法

1. 調査対象者

A大学1・2年生男子95名、女子50名、計145名

2. 調査尺度

長島他（1966）の Self-Differential 尺度からポジティブな意味とネガティブな意味をもつ人格特性語（形容詞）38語に、個性的人物に関する予備調査と詫摩（1984）の個性に関する記述の中から17個の人格特性語を採集し、合計55個の人格特性語（表1参照）に基づいて以下の手続きで使用する評定尺度を構成した。

3. 調査手続き

(1) 個性概念の評定

上記の55個の人格特性語を用いて①個性的人物は少なく平凡な人は多い。
②個性には望ましい側面と望ましくない側面がある。という2つの基準で自分の身近にいる個性的人物の印象を7段階で評定させた。

(2) 現実自己像、反映自己像、理想自己像の評定

(1)に同じく上記55個の人格特性語を用いて、現実自己像(ありのままの自分)、反映自己像(親友が自分に求め期待する行動様式や性格)、理想自己像(絶えず自分の目標としていただいている行動様式や性格)の各側面について5段階評定をさせた。

(3) 自尊感情及び虚構性の調査

自己評価についての一般的傾向を見る目的としてローゼンバーグの自尊感情尺度及び自己認知における社会的望ましさのチェックを目的としてMPIの虚構尺度に3段階の回答をさせた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 個性概念の検討

男子35名、女子35名、計70名を対象として55個の人格特性語の評定による個性概念について主因子法による因子分析を実施した。その結果第5因子から第7因子にかけて固有値の変動が小さいことと、因子の解釈可能性を考慮して6因子と同定し、バリマックス回転を実施した。

表1はバリマックス回転後の因子負荷量と固有値を示している。第1因子は固有値=8.1771(14.9%)であり、この因子に負荷している項目は誠実、無口、暖かい、たくましい、謙虚、親切、すなお、責任感のある、おだやかという対人的に望ましい項目と、集中力のある、実行力のある、洞察力のある、有能な、意志の強い、見識の高い、判断力のあるという知性的側面を中心とした項目に高い負荷を示していることから「対人的適応と知性」の因子と命名した。個性的人格像はまず第一に社会性と知性の両特性を兼ね備えていることがわかる。第2因子は、臆病な、ふまじめな、不安定な、無気力な、鈍感な、親切な、依存的、同調的、子どもっぽい、小心な、地味、などの項目に高い負の負荷量を示すことから、自我の弱さを否定する「自我の強さ」に関する因子と見なせるであろう。第3因子は、外向的、活発、元気、ものおじしない、明るい、積極的という項目に高い負荷を示すことから「対人的明るさ・積極性」の因子と命

表1 個性概念の因子分析表

番号	項目 / 因子	I	II	III	IV	V	VI
1	外向的な	.0228	.0355	.9859	-.0226	.1099	.1165
2	かどのある	-.0409	.0122	.1515	.1172	-.1223	.9728
3	活発な	.0175	.0527	.9832	-.0198	-.1153	.1281
4	臆病な	.1988	-. 7257	-.1971	.0542	.5886	.2144
5	誠実な	.9394	-.2977	.1061	.0512	-.1223	.0004
6	元気な	.1495	.1960	.6092	.5594	-. 5013	-.0602
7	ものおじしない	.2311	.0907	.5894	-.0003	-. 7680	-.0305
8	感情的な	-.0590	-.1886	-.1744	.3952	-. 7744	.4109
9	無口な	.7212	-.3478	-.4364	.0004	.1592	.3769
10	暖かい	.8333	-.0004	.2780	.3313	.0008	-.3439
11	人目を気にしない	.2165	.0831	.1737	.2167	-. 9025	.2339
12	たくましい	.7278	.0899	-.1492	.2568	-. 6093	.0505
13	ふまじめな	.1384	-. 5059	-.0596	.2082	-. 6336	.5258
14	不安定な	.1610	-. 6845	-.1338	-.0533	.1606	.6774
15	実行力のある	.7351	.3622	.4741	-.0533	-.2155	.0133
16	冷静な	.7651	-.0567	-.2023	-.0592	-. 5446	.2609
17	にぎやかな	-.2292	-.1188	.9131	-.1778	-.1967	-.1703
18	集中力のある	.8522	-.1555	-.2223	-.1820	-.4064	-.0407
19	自分勝手な	.1099	-.4334	.3566	-.4203	-.3552	.6082
20	無気力な	.4582	-. 6217	-.0375	-.0849	.4301	.4579
21	近寄りがたい	.3081	-.2324	-.3418	-.1279	-.2216	.8177
22	明るい	.1610	-.0491	.8494	.2549	-.3146	-.2932
23	鈍感な	-.1271	-. 9044	-.0156	-.1574	-.1913	-.3227
24	感覚的な	.2190	-.2785	.1918	-.2095	-. 8825	-.1226
25	自己主張する	.1709	-.0834	.0388	-.3761	-. 8621	-.2783
26	謙虚な	.8679	-.4340	-.1437	.0008	.1858	.0552
27	親切な	.6518	-. 5730	.0197	.0358	-.4274	-.2494
28	強気な	.2673	-.0003	.3643	-.2230	-. 6968	.5103
29	目立つ	-.3228	.1464	.4664	-.4349	-. 6483	.2167
30	依存的な	.1003	-. 9064	-.1244	.1361	-.1992	.3075
31	独創的な	.3509	.3992	.1359	-. 7205	-.3778	.1930
32	積極的な	.2713	.1846	.8914	-.1159	-.2876	.0384
33	同調的な	.0225	-. 9677	-.0125	.1312	-.1988	-.0780
34	こどもっぽい	-.3126	-. 8501	-.0009	-.1770	-.1493	.3545
35	風変わりな	.0837	-.3097	-.0624	-. 9255	-.1832	.0547
36	孤独な	.7218	-.2730	-.4309	-.1730	-.0661	.4294
37	すなおな	.6865	-.3163	.0739	.1543	-.2630	-. 5745
38	あかぬけた	.0201	.1389	.4665	-.1805	-. 8239	.2259
39	頼もしい	.8849	.2851	.2934	-.0380	-.1160	.1859
40	洞察力のある	.8815	.1789	-.0890	-.3821	-.0474	.1861
41	開放的な	.0799	-.3210	.3206	-. 5283	-.7117	-.0448
42	判断力のある	.9108	.2725	-.0102	-.2517	-.1791	.0237
43	敏感な	.6837	-.0907	.1243	-.6939	.1263	-.1059
44	小心な	.1105	-. 9400	-.2485	-.1623	.0735	.1024
45	有能な	.5575	-.2528	-.1046	-. 7633	.1401	-.1089
46	地味な	.4246	-. 7206	-.3556	.2974	.2297	-.1803
47	意志の強い	.8479	-.0499	-.0595	-.4049	-.2633	.2039
48	甘える	-.2105	-. 9584	-.0005	-.1686	-.0806	.0454
49	おたやかな	.8027	-. 5116	.0106	-.1809	.1529	-.1938
50	責任感のある	.9470	.0517	.2892	.0646	-.1033	-.0440
51	見識の高い	.9416	.1137	.1765	-.2332	.0983	.0786
52	存在感のある	.4831	.4010	.3977	-. 6326	-.1791	.1014
53	だらしない	-.2271	-. 7448	.2072	-.0126	-.2469	.5380
54	懐疑的な	.2229	-. 8730	.1869	-.0091	.3725	.1195
55	慎重な	.4942	-. 7146	-.0009	-.3929	-.1656	-.2509
固有値 (寄与率)		8.1771	6.0141	4.1596	2.6033	3.7001	2.5803

名した。以上の3因子は、社会的に望ましい側面での個性的人格を示しているものと思われる。それに対して、第4因子は風変りな、独創的、開放的、有能な、存在感のあるという項目に負の負荷を示していることから、対人的・集団的場面で自己をアピールしえない「非個人的個性」の因子と命名した。対人的にいつも消極的であるため結果として目立ってしまう個性的人格像を表わしているものと思われる。第5因子は臆病という項目に正の負荷、そして元気、ものおじしない、感情的、人目を気にしない、たくましい、ふまじめな、冷静、自己主張、強気という項目に負の負荷を示すことから、対人的、集団的場面で消極的かつ自信のない「対人的萎縮」の因子と命名できるであろう。そして第6因子はかどのある、自分勝手、近よりがたい、強気、だらしがないという項目に高い負荷を示すことから、対人的場面において社会性協調性が欠如し、また他者の立場を考慮しえない「自己中心性」の因子と見なせるであろう。以上の3因子は社会的に望ましくない側面での個性的人格を示しているものと思われる。

個性概念の因子分析の結果から、大学生が彼らを取り巻く仲間や友人に関する社会的認知として、望ましい個性的人格像と望ましくない個性的人格像を形成していることがわかった。各々の因子の負荷量の方向から、対人的適応と知性、対人的明るさ・積極性、自己中心性を持つ人が少なく、自我の弱さ、非個人的個性、対人的萎縮を示す人が多いと認知していることがわかる。

表2は各因子を単純加算した上で、各因子間の相関行列を男女毎に示してある。男女とも対人的適応と知性が対人的萎縮と負の相関を示している。ところが男子の自我の強さは対人的明るさ・積極性と正の相関を示しているが、女子では自我の強さと自己中心性が負の相関を示していることがわかる。また男子の対人的明るさ・積極性は対人的萎縮と負の相関を示しているが、女子の対人的明るさ・積極性は非個人的個性、対人的萎縮とかなり高い負の相関を示している。このように各因子間の関係には少なからず性差が見られている。また各因子と自尊感情、虚構成尺度の間にはほとんど相関は見られず、個性概念の評

定に自尊感情、虚構性の程度が何ら影響を与えていないことがわかる。つまりこの結果から個性概念の6因子は、かなり一般的な意味での社会的認知であると言える。

表2 個性概念の因子間及び自尊感情、虚構尺度との相関

因子	I	II	III	IV	V	VI	自尊感情	虚構尺度
I		-.180	.306	-.328	-.379 ^{**}	.148	.131	-.017
II	-.177		.034	.062	.031	-.509 ^{***}	.056	-.157
III	-.113	.358 ^{**}		-.498 ^{***}	-.741 ^{***}	.042	.210	-.006
IV	-.441 ^{***}	.319	.294		.556 ^{***}	-.138	-.153	.042
V	-.352 ^{**}	-.121	-.358 ^{**}	.151		-.231	-.200	-.128
VI	-.186	-.196	-.186	-.332	-.206		.151	.244
自尊感情	-.235	-.235	.192	.235	-.233	.115		-.009
虚構尺度	.120	-.071	.121	.270	-.059	.062	-.053	

** p < .05 *** p < .01 下段=男子、上段=女子

以上に検討してきた個性概念の因子は従来の自己概念の内容とどのように関係しているであろうか。ここで本研究で使用した長島他（1966）の自己概念の因子と個性概念の因子との対応について述べておくことにする。

長島らは大学生の自己概念として、外向的、おしゃべりなどの項目に高く負荷する「向性」の因子、丸い、暖かいなどの項目に高く負荷する「情緒安定性」の因子、そして勇敢、たくましいなどの項目に高く負荷する「強靱性」の因子、誠実、まじめなどの項目に高く負荷する「誠実性」の因子、病弱、不安定に高く負荷せる「過敏性」の因子、理知的、冷静などに高く負荷する「理知性」の6因子を明らかにしている。

表3 個性概念と自己概念の対応

個性概念の因子	自己概念の因子（長島他、1967）
I. 対人的適応と知性	I. 向性
II. 自我の強さ	II. 情緒安定性
III. 対人的明るさ・積極性	III. 強靱性
IV. 非個人的個性	IV. 誠実性
V. 対人的萎縮	V. 過敏性
VI. 自己中心性	VI. 理知性

表3は個性概念の因子と長島らの自己概念の因子の対応関係を示している。本研究での対人的適応と知性は、自己概念の情緒安定性、誠実性、理知性の一部の項目を含んでいる。また自我の強さは自己概念の強靱性を、対人的明るさ・積極性が自己概念の向性をそのまま反映していることがわかる。そして非個人的個性は自己概念の情緒安定性、強靱性のネガティブは側面の一部に対応し、対人的萎縮は自己概念の強靱性と誠実性のネガティブな側面の一部に対応していることがわかる。そして最後に自己中心性は、自己概念の強靱性のネガティブな側面と過敏性を含む形となって表われている。

2. 個性化の側面から見た自己概念の諸相

先の個性概念の因子分析の結果から、個性的人格の側面として対人的適応と知性、自我の強さ、対人的明るさ・積極性、非個人的個性、対人的萎縮、自己中心性の6つの側面が明らかにされた。いずれの側面も対人的・集団的場面に関係した人格特性であり、現代大学生の自己提示のあり方を示していると考えられる。Scheier & Carver (1983) は自己像の2側面—対人的・社会的場面で機能する公的自己とそれとは直接に関係しない私的自己—について分類しているが、本研究で示された個性化の次元はこの公的自己のあり方に関係していると思われる。

それでは公的自己に関係しているであろう個性化の側面から、現実自己、友人との関係における反映自己、そして理想自己は相互にどのように関わっているのでしょうか。まず最初に個性概念の側面から3自己像を的確に把握するために各々の個性概念の因子毎に、得点を算出し、3自己像の合計点に関して、主成分分析を実施した。なおここでの被験者数は男子95名、女子50名、計145名である。その結果、対人的適応と知性では固有値=8.708(39.5%)、自我の強さでは固有値=4.366(27.29%)、対人的明るさ・積極性では固有値=3.936(56.28%)、非因性的個性では固有値=2.874(41.07%)、対人的萎縮では固有値=2.129(15.21%)、自己中心性では固有値=3.081(38.52%)の第1成分が抽出された。この第1成分に負荷しない項目は今後の分析では除外した。

表4 現実自己像の性差

因子 \ 性	男 子	女 子	t 値
I 対人適応と知性	46.631 (8.267)	44.960 (6.717)	1.230 ns
II 自我の強さ	-28.600 (6.820)	-29.140 (6.566)	0.458 ns
III 対人的明るさ	16.536 (3.658)	17.300 (4.186)	-1.136 ns
IV 非個性	-10.389 (2.177)	-9.840 (2.444)	-1.383 ns
V 対人的萎縮	-21.389 (3.078)	-21.680 (4.249)	0.472 ns
VI 自己中心性	17.115 (4.433)	17.680 (4.420)	-0.730 ns

表5 現実自己像の因子間の相関の性差

因子	I	II	III	IV	V	VI
I		.137	.395 ^{***}	-.658 ^{***}	-.510 ^{***}	-.030
II	.374 ^{***}		.233	-.240	.001	-.771 ^{***}
III	.429 ^{***}	.386 ^{***}		-.587 ^{***}	-.794 ^{***}	.011
IV	-.591 ^{***}	-.061	.366 ^{***}		.634 ^{***}	.130
V	-.426 ^{***}	-.232 ^{***}	.731 ^{***}	.454 ^{***}		-.289 ^{***}
VI	.412 ^{***}	-.706 ^{***}	-.159	-.090	-.119	

下段=男子、上段=女子

* p<.05

*** p<.01

主成分分析の結果得られた個性概念の各側面での現実自己の平均値を性別に示したのが、表4であり、その相関行列を性別に示したのが表5である。表4より現実自己の各側面には全く性差が認められないことがわかる。しかし各側面の相関係数では若干性差があることがわかる。男子では対人的適応と知性が自我の強さ、対人的明るさ・積極性、自己中心性と正の相関が見られ、非個性的個性、対人的萎縮と負の相関が見られている。それに対して女子では対人的適応と知性が対人的明るさ・積極性とだけ正の相関を示し、自我の強さ、自己中心性とは関係のないことがわかる。このような結果から男子の現実自己の評定に社会的望ましさの要因が影響していることが予想される。

次に個性的側面での現実自己が一般的な自己評価である自尊感情をどのように規定し、そして虚構性尺度とどのように関係しているかについて検討する。

表6より男子では対人的適応と知性、自我の強さ、対人的明るさ・積極性は自尊感情と正の相関を示し自己評価を高めることがわかる。反対に非個性的個性、対人的萎縮、自己中心性は自尊感情と負の相関にあり自己評価を低める方向にある。女子の結果も対人的適応と知性を除き男子と同様の結果にある。ところで男子の対人的適応と知性、自我の強さは虚構性尺度と正の相関を示し現実自己の評定に社会的望ましさの要因が反映されることを示している。しかし男子の自己中心性は虚構性尺度と高い負の相関($r = -.418$)を示しており、この結果は他者の立場や視点を採用するという役割取得能力(木下、1978)が未発達な者は、好ましい自己提示や他者から期待される反映的自己に関心が薄いことをうかがわせている。

次に現実自己、反映自己、理想自己の関係性について検討する。まず個性化の各側面における3自己像の男女こみの平均値を比較したのが図1である。図1から対人的適応と知性、自我の強さ、対人的明るさ・積極性、そして自己中心性は反映自己、理想自己においてより肯定的方向にあることがわかる。しかし反対に非個性的個性、対人的萎縮はより否定的方向を示している。すなわち対人的に積極的であろうと望む反面消極的でもありたいという自己像のアンビー

表6 現実自己と自尊感情、虚構尺度の相関

	現実自己と自尊感情		現実自己と虚構尺度	
	男子	女子	男子	女子
I 対人適応と知性	.414 ^{***}	.266	.222 ^{**}	.167
II 自我の強さ	.370 ^{***}	.402 ^{***}	.321 ^{**}	.069
III 対人的明るさ	.391 ^{***}	.356 ^{**}	-.001	.034
IV 非個性	-.346 ^{***}	-.282 ^{**}	-.115	-.116
V 対人的萎縮	-.351 ^{***}	-.304 ^{**}	.122	.119
VI 自己中心性	-.245 ^{***}	-.304 ^{**}	-.418 ^{***}	-.212

** p < .05 *** p < .01

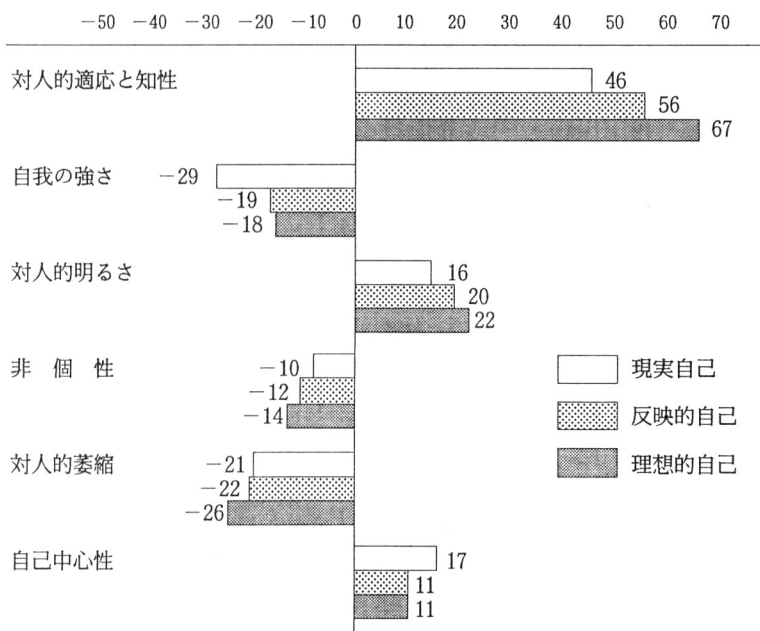


図1 各々の側面における自己像の変化

パーレントな姿が浮び上がってくる結果にある。この結果は友人関係の不安定性の存在を予想させている。

表7は3自己像間の相関係数を男女別に示している。まず現実自己と反映自己の間には、男子においてほとんど相関が見られず友人関係が現実自己に全く影響を与えていないことがわかる。しかし女子では対人的明るさ・積極性を除き、すべての側面で有意な相関を示し、友人関係が現実自己を規定していることがわかる。また現実自己と理想自己の間の相関が弱い、しかし、自己中心性は男女とも高い相関が見られ、より自己中心性を希求する態度が認められる。女子においても対人的萎縮は現実自己と理想自己の相関が高く対人的に消極的であろうとする一面をうかがわせている。このような結果から男子の現実自己と反映自己、現実自己と理想自己の関係性はいくぶん分離した形になっている。梶田(1982)はこのような自己像の矛盾、葛藤の解決様式として「理想は理想、現実 is 現実」という形で合理化が起ることを指摘している。

表7 3つの自己像間の相関の性差

因子 性	現実自己と反映自己		現実自己と理想自己		反映自己と理想自己	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I 対人適応と知性	.146	.308 ^{**}	.192	.177	.409 ^{***}	.591 ^{***}
II 自我の強さ	.103	.284 ^{**}	.270 ^{**}	.300 ^{**}	.489 ^{***}	.249
III 対人的明るさ	-.033	.251 ^{**}	-.032	.204	.350 ^{***}	.239
IV 非個性	.039	.359 ^{**}	.167	.281 ^{**}	.364 ^{***}	.458 ^{***}
V 対人的萎縮	-.001	.401 ^{***}	.012	.417 ^{***}	.432 ^{***}	.481 ^{***}
VI 自己中心性	.159	.404 ^{***}	.440 ^{***}	.501 ^{***}	.526 ^{***}	.180

** p < .05 *** p < .01

以上に述べてきたように自己像をめぐる意識のあり方には少なからず性差が見られる。男子の自己像には友人関係の影響が少なく、反映自己や理想自己のあり方は現実自己を動機づけることのできない「願望」のレベルにあることが考えられる。それに対して女子の自己像は友人関係の影響が強く、反映自己や

理想自己に近づきたいという「意志」のレベルにあることをうかがわせている。このような性差から自己像のズレが自尊感情に与える影響にも性差のあることが予測できる。

表8は現実自己と理想自己のズレおよび現実自己と反映自己のズレの程度と自尊感情との相関を男女別に示している。男女とも対人的適応と知性、自我の強さ、対人的明るさ・積極性はいずれの自己像のズレにおいても自尊感情を低下させていることがわかる。特に男子においてその傾向は大である。しかし非個性的個性、対人的萎縮、自己中心性はいずれの自己像のズレは男子において自尊感情を高めていることがわかる。対人場面に消極的であろうとする姿が自尊感情を高めるはずはなく、男子の自己中心性のあり方と考え合せると現実の体験に裏づけのないにせの自尊感情を抱いていることが考えられる。

表8 諸自己像のズレと自尊感情の相関の性差

ズレの方向	因 子	男 子	女 子
理想自己 vs 現実自己	I 対人適応と知性	-.379 ^{***}	-.328 ^{***}
	II 自我の強さ	-.433 ^{***}	-.329 ^{**}
	III 対人的明るさ	-.280 ^{***}	-.193
	IV 非個性	.253 ^{**}	.055
	V 対人的萎縮	.154 ^{**}	.359 ^{**}
	VI 自己中心性	.251 ^{**}	.238
反映的自己 vs 現実自己	I 対人適応と知性	-.334 ^{***}	-.304 ^{**}
	II 自我の強さ	-.359 ^{***}	-.277
	III 対人的明るさ	-.380 ^{***}	-.278
	IV 非個性	.273 ^{***}	.195
	V 対人的萎縮	.258 ^{**}	.275
	VI 自己中心性	.244 ^{**}	.170

** p<.05 *** p<.01

3. 因子分析を通して見た3自己像

個性化の各側面からとらえた3自己像の関係性について男女別に主因子法による因子分析を実施し、固有値が1以上の4因子についてバリマックス回転を行なった。先に示した自己像の分離は因子分析の結果にも表われるであろうか。

表9 3つの自己像の因子分析(男子)

尺度		因子			
		I	II	III	IV
現実自己	对人的適応と知性	.3184	.0602	.9246	-.1998
	自我の強さ	-.0686	-.3931	.5351	-.7445
	对人的明るさ	.0658	.0003	.9849	-.1600
	非個性	.0778	-.2746	-. 9352	-.2093
	对人的萎縮	.1388	-.1866	-. 9684	-.0891
	自己中心性	-.2663	.4080	-.2301	.8423
理想自己	对人的適応と知性	.4964	-. 5060	.1798	.6819
	自我の強さ	-.0481	-. 9872	-.1443	-.0461
	对人的明るさ	.3146	-.0706	-.0246	.9462
	非個性	-. 4553	.2683	-.2849	-. 7996
	对人的萎縮	-.2845	-.1502	.0002	-. 9468
	自己中心性	-.1395	.8499	.1233	.4923
反映自己	对人的適応と知性	.9957	-.0003	.0494	.0770
	自我の強さ	-.1899	-. 9702	-.1144	.0962
	对人的明るさ	.9551	.1184	-.1100	.2479
	非個性	-. 9832	-.0004	-.1182	-.1384
	对人的萎縮	-. 9345	-.2775	-.0003	-.2223
	自己中心性	.2165	.9678	.1286	.0000
固有値		2.8158	2.7017	2.2672	2.7695

表9は男子の3自己像の因子分析の結果を示している。第1因子は反映自己の対人的適応と知性、対人的明るさ・積極性、理想自己の対人的適応と知性に高い正の負荷量をもち、反映自己の非個人的個性、対人的萎縮、理想自己の非個人的個性に高い負の負荷量を示すことから「望ましき自己像の理解」の因子と命名できるであろう。第2因子は反映自己と理想自己の自己中心性に高い正の負荷を示し、自我の強さに高い負の負荷を、そして理想自己の対人的適応と知性に負の負荷を示している「自己中心性と自我の強さを望ましいと反動形成的に希求する」因子と考えられる。第1因子、第2因子は現実自己のいずれの側面にも高い負荷を示すことがなく、現実自己が反映自己、理想自己からはっきりと分離する者が多いことを示している。第3因子は現実自己の対人的適応と知性、自我の強さ、対人的明るさ・積極性に高い正の負荷を、非個人的個性、対人的萎縮に高い負の負荷を示し、反映自己、理想自己を全く位置づけることのできない「唯我独尊という特徴をもつ」因子になっている。第4因子は現実自己の自己中心性に高い正の負荷を、自我の強さに高い負の負荷を示し、理想自己の対人的適応と知性、対人的明るさと積極性、自己中心性に高い正の負荷を非個人的個性、対人的萎縮に高い負の負荷を示している。また反映自己を位置づけることができない特徴をもっていることから、現実の友人関係がうまくいかず「補償的に望ましい理想自己を希求する」因子となっている。

男子に比較して女子の3自己像の関係性はどのような特徴を見せるであろうか。

表10は女子の3自己像の因子分析の結果を示している。第1因子は反映自己と理想自己における対人的適応と知性、対人的明るさ・積極性に高い正の負荷を示し、逆に非個人的個性、対人的萎縮に高い負の負荷を示すことから男子と同様に「望ましき自己像の理解」の因子と見なせる。そして第1因子は男子と同様に現実自己を位置づけることができていないことがわかる。第2因子は反映自己と現実自己の自我の強さに高い正の負荷を、自己中心性に高い負の負荷を示している。基本的に「友人から期待される自我の強さに応える」因子であ

表10 3つの自己像の因子分析(女子)

尺度		因子			
		I	II	III	IV
現実自己	对人的適応と知性	.3108	.0316	.9498	-.0128
	自我の強さ	-.3518	.6402	.3917	-.5593
	对人的明るさ	.2934	-.0385	.9438	-.1475
	非個性	-.0978	-.0559	-. 9045	-.1071
	对人的萎縮	-.2482	.2581	.9045	-.2314
	自己中心性	.3789	-. 7082	-.1787	.5682
理想自己	对人的適応と知性	.7578	-. 6368	.0324	-.1376
	自我の強さ	.0716	.0726	-.1474	-. 9837
	对人的明るさ	.6270	-. 5190	.3282	-.4791
	非個性	-. 8287	.3972	-.3875	.0724
	对人的萎縮	-. 5773	.7485	-.2341	-.2270
	自己中心性	.2010	-.2392	.0889	.9457
反映的自己	对人的適応と知性	.9709	.0258	.2047	.1223
	自我の強さ	.4366	.8730	-.1029	-.1909
	对人的明るさ	.9781	.1832	.0757	.0619
	非個性	-. 8766	-.1377	-.4522	-.0897
	对人的萎縮	-. 9172	.0003	-.3072	-.2533
	自己中心性	-.1963	-. 9770	.0421	.0702
固有値		4.2780	2.4522	2.7426	1.6858

ろうか。しかしこの因子に関係している者は理想自己における望ましき側面での自己像を抱くことができていないことがわかる。第3因子は男子と同様に現実自己における対人的適応と知性、対人的明るさ・積極性に高い正の負荷を、非個人的個性、対人的萎縮に高い負の負荷を示し、反映自己、理想自己を位置づけることのできない「唯我独尊」の因子となっている。最後に第4因子は現実自己と理想自己における自我の強さに負の負荷を、自己中心性に正の負荷を示す「自我の弱さと自己中心性の肯定」の因子であることがわかる。第4因子は反映自己を全く位置づけることができず自閉的なきらいがうかがえる。

3 自己像の関係性を因子分析により検討した結果男女とも基本的に関係性の薄い分離した自己像を形成していることがわかる。

4. 個性概念の認知と自己像の関係

これまでの対人認知の研究において他者認知が自己認知に先行することが指摘されている。このような意味において我々が自己を記述し把握するやり方は社会的認知の一側面であると言える。ここでは個性概念に示される社会的認知と自己認知の関係性について男女毎に実施した正準相関分析の結果について検討する。ちなみに正準相関分析とは説明変数（個性概念）間の合成変量と目的変数（3自己像）間の合成変量の相関係数が最大になるものを求め、両者の関係のあり方を確認する方法である。

表11は男女毎に実施した正準相関分析の結果（正準係数）を示している。その結果男子では固有値＝.4042、正準相関係数＝.6358の有意な正準相関係数が得られた。この正準相関係数に高い値（正準係数）を示す項目は、説明変数では、自己中心性と対人的明るさ・積極性が正の係数を示し、対人的適応と知性、自己の強さは高い負の係数になっており、男子の個性概念における中心的イメージは対人的明るさ・積極性と自己中心性であることがわかる。目的変数では現実自己における自己中心性と自我の強さに高い負の係数が見られ、理想自己における対人的適応と知性、自我の強さに高い負の係数が見られている。この結

表 11 正準相関分析の性差

		因 子	男 子	女 子
説 明 変 数	個 性 概 念	I 対人適応と知性	-.6632	.8798
		II 自我の強さ	-.8593	.6402
		III 対人的明るさ	.6084	-.5132
		IV 非個性	-.1249	-.0581
		V 対人的萎縮	.0168	-.2510
		VI 自己中心性	.7668	.2253
目 的 変 数	現 実 自 己	I 対人適応と知性	-.0343	.2088
		II 自我の強さ	-.5791	.0423
		III 対人的明るさ	.2967	-.2216
		IV 非個性	-.2191	.3944
		V 対人的萎縮	-.0400	-.5193
		VI 自己中心性	-.5325	-.0129
	理 想 自 己	I 対人適応と知性	-.8060	.3554
		II 自我の強さ	-.3765	.4607
		III 対人的明るさ	.1173	-.2064
		IV 非個性	-.2019	.0654
		V 対人的萎縮	-.0173	-.6227
		VI 自己中心性	-.0727	.2124
	反 映 自 己	I 対人適応と知性	.2042	.1648
		II 自我の強さ	.4520	-.3599
		III 対人的明るさ	.1401	-.0611
		IV 非個性	.3336	.3665
		V 対人的萎縮	-.2759	.1682
		VI 自己中心性	-.1582	-.1770
固 有 値			.4042	.7058
正 準 相 関 係 数			.6358	.8401

果から男子では望ましき個性像の側面で、現実自己、理想自己を的確に把握できないことがわかる。そして現実の自我の弱さと結びついて反映自己における自我の強さは高い正の係数になっている。

女子の正準相関分析は男子の結果とは対照的である。女子の正準相関分析の結果固有値=.7055、正準相関係数=.8401という有意な正準相関係数が得られた。表11に示しているように説明変数では対人的適応と知性、自我の強さに正の高い係数が見られ、対人的明るさ・積極性には負の係数が見られていることから、女子の個性概念における中心的イメージは対人的適応と知性と自我の強さであることがわかる。このように望ましい個性概念を抱く女子は3自己像をどのように位置づけているだろうか。目的変数における正準係数は現実自己における非個人的個性に正の係数が、対人的萎縮に高い負の係数が見られている。しかし理想自己においては対人的適応と知性、自我の強さに正の係数が見られ望ましい理想自己像を抱いていることがうかがえる。しかし対人的萎縮は現実自己におけるそれよりも高い正の係数を示しているが、この結果は女性役割における対人的消極性が影響しているのであろうか。これに関連することとして反映自己における自我の強さに負の係数が見られている。

以上に検討してきたように、個性概念における性差はそのまま3自己像の位置づけの性差となって表われていることが、正準相関分析の結果分る。

参 考 文 献

- 柏木恵子 1981 社会化と個性化に関する断章 東洋ら編 講座 現代の心理学第2巻 人間の成長 第4章 小学館
- 梶田毅一 1982 自己と他者 東洋ら編 講座 現代の心理学第7巻 個人・集団・社会 第2章 小学館
- 木下芳子 1977 役割取得能力の発展(一) 児童心理 9月号 187-208
- 宮川知章 1973 青年の性格構造 依田新ら編 現代青年心理学講座4 青年の性格

青年期における社会的認知と自己像の関係性についての研究(島袋)

形成 第1章 金子書房

- 長島貞夫他 1966 自我と適応の関係についての研究(2) 東京教育大学教育学部紀要、
13、59-83
- Scheier. M. F., & Carver. C. S., 1983 Two Sides of the Self : One for You
and One for Me, in Suls. J. & Greenwald. A. G. (Eds) Psycho-
logical Perspective on the Self. Vol.2 Lawrence Erlbaum ASSO-
ciates. Publishers. London.
- シュプランガー, E. 土井竹治訳 1924 青年の心理 五月書房
- 詫摩武俊 1984 個性と適応の心理学 講談社 現代新書
- Wicklund, R. A., & Gollwitzer, P. M. 1982 Symbolic Self-Completion.
Lawrence Erlbaun Associates, Inc., Publisher.
- Ziller, R. C. 1963 Individuation and Socialization - A Theory of Assimila-
tion in Large Organizations. Human Relations. Vol. 16 341-
360